

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 1 日現在

機関番号：11101

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21530509

研究課題名（和文） 若者の地域移動と貧困化に関する社会学的研究

研究課題名（英文） Sociological Study of Migrant Youth and Poverty in Japan

研究代表者

山口 恵子（YAMAGUCHI KEIKO）

弘前大学・人文学部・准教授

研究者番号：40344585

研究成果の概要（和文）：地方の若者の大都市への労働移動は、機会にも困難にもなりうる。低学歴の若者にとって、高校を通じた大都市での正規雇用の就職は一定の安定につながっているが、いったん仕事をやめると、地元に戻って不安定就労となっている。一方、最初から派遣などの非正規雇用で働き始めた若者は、景気や企業の動向に左右されながら、一貫して不安定就労状態が続く。移動した先で、また地元に戻る際も、地元の友人や実家は大きな資源となっており、逆にそれらに乏しい場合は、大きな困難が予想される。

研究成果の概要（英文）：Relocation of youths for employment from local to urban areas can be an opportunity or trouble. Youths with low education have stability in urban areas when they find jobs using the traditional Japanese system from school to work. If they quit their jobs, however, they go back to their home towns and have unsteady careers there. Meanwhile, youths who start to work in non-regular employment after school continue to be in precarious positions depending a great deal on economic trends and business strategy. Local friends and the family home are important resources for the youths who were in urban areas and are going back to their hometowns. In other words, we can suppose that people who have little resources tend to fall into difficulties.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：若者、地域移動、貧困、ホームレス、非正規雇用、地方

1. 研究開始当初の背景

(1) 若者の困難さについては、フリーター、ニートなどとして、1990年代後半から多くの報道がなされ、また調査・研究も積み重ねられてきた。2000年代半ばからは、「ネットカフェ難民」など、若者の貧困やホームレス問

題に注目が集まっている。

(2) 若者が貧困・ホームレス状態となっていくとき、地方と大都市の格差、そのなかでの人々の移動と生活の不安定化という問題がある。この地域移動と不安定労働・生活の関

係について、とりわけ現代の若者研究やホームレス研究の分野では、実証研究がなされることは少なかった。生活の不安定化・貧困化を促す背景のひとつとして、地域移動に注目する必要があると考えられた。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、日本の周縁部に位置し、労働移動がさかんな青森県出身の若者を事例として、地域移動の背景、動機、人間関係、労働・生活状況などのプロセスを捉え、若者の移動と労働・生活の不安定化について社会的に明らかにすることを目的とした。

(2) とりわけ、現代日本において社会構造が大きく変容するなかで、多くのコストとネットワークの再編を余儀なくされる大都市への地理的移動は、若者の労働・生活にどのような影響を及ぼすのか、そこにはどのような困難や乗り越えが見られるのかということに注目した。

3. 研究の方法

(1) 研究の方法は、文献・資料・統計の収集と分析、そして聞き取り調査を行った。文献・資料・統計については、若者・貧困・ホームレス・労働・教育などの分野について収集し、分析した。

(2) 主な聞き取り調査は、基本的に青森県の若者を対象とした。青森県出身者で現在関東圏にて働いている若者、青森県在住のUターンしてきた若者、そして関東圏在住の不安定労働・居住状態の若者の三層を想定した。対象者は高校・大学の学校関係者より紹介を受けた。聞き取りは一人1~2時間以内で、一人1~2回、半構造型の面接聞き取り調査を行った。

具体的には、①大学を卒業して現在関東圏で働く女性8人、男性1人、②工業高校を卒業して、現在関東圏で働く男性7人、③高校を卒業して派遣労働で働き、現在青森の地元にいる男性3人、④関東圏在住の不安定労働・居住でホームレスの男性2人に協力を得た。

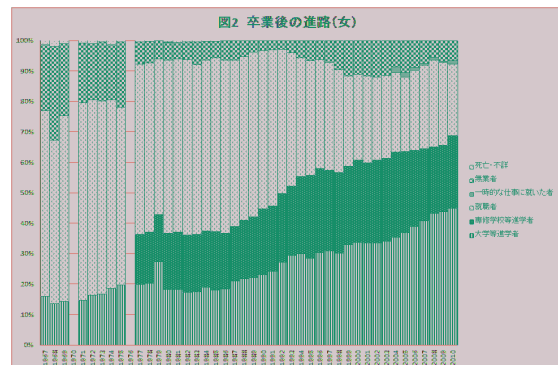
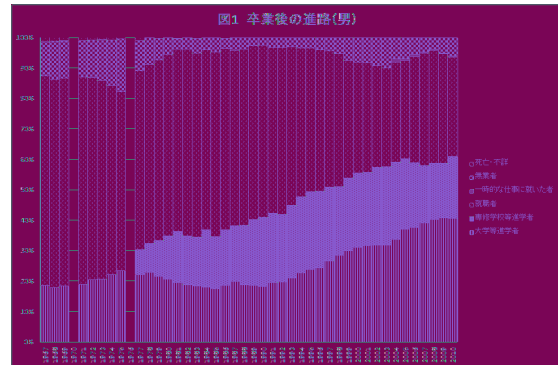
(3) そのほか補足的に、青森県内の高校の進路指導の教員や、若者が多く登録している派遣会社の社員、遠方からの労働者を雇用している企業関係者、ホームレス支援を行っている団体の関係者などへも、若者を取り巻く学校や仕事、生活の状況について聞き取りを行った。

4. 研究成果

(1) 地方の若者を取り巻く経済・雇用環境
青森県は、全国でも厳しい経済と雇用環境

にある。2010年度の青森県の有効求人倍率は0.39であり、全国の0.56と比べても、依然として低水準である。大きな製造業も育たず、脆弱な経済・雇用基盤にある。そうしたなかで、学校基本調査によると、若者の進学率は急速に伸び、就職率は低下してきたが(図1、図2)、2010年度の就職率は28.5%と、全国平均の15.8%と比べて依然として高い。その若者の就職は、他県と比べると、県外就職が多い県となっている。

青森県は従来から出稼ぎや集団就職などの労働移動が盛んであるが、現代においても、労働力の供給地としての役割を果たしていると考えられる。



(2) 若者の労働移動のプロセス

こうした現代の若者の労働移動のプロセスについて、聞き取り調査からは次のようにまとめることができる。

4年制大学に入学した若者は、大学で関心のある分野や人と出会ったり、技能や経験を身につけたりしていた。そして、それを生かすためにも、東京圏で正規労働にて就職した。その後、人によっては転職し、派遣労働などで働く不安定な期間もあったが、実務経験などを着実に身につけながら、比較的定着的に大都市で働いていた。

一方、工業高校を卒業後、東京圏で就職した若者は、高校に入る時点から就職を意識していた。そして多くは当初、県内就職を希望していたが、厳しい就職状況のなかで、県外へと水路づけられていた。学校・企業の伝統的就職斡旋システムのなかでの大都市への

移動は、資源の乏しい高卒就職者にそれなりの生活と仕事を準備する下地があり、また期待される資格や技術の習得のなかで、スキルアップや、地元に戻る、というひとまずの見通しがもてるものとしてあった。しかし、いったん初職から離職すると、ほとんどがすぐに青森の実家に帰っており、そして地元では正規労働につくのは難しい状況にあった。

さらに、高校を卒業後、正規労働の仕事につけず、地元の派遣労働で働き始めた若者は、途中で東京圏の製造業の派遣会社へと働きに出ている。派遣会社を通じて県外の工場働くこと自体は、それほどハードルが高いものではなく、派遣先も派遣会社もいくつも変えながら働いた。しかし、そうした県外での仕事が切れたこと、家族や友人の事情などさまざまな状況のなかで、青森の地元に戻る。その後も正規労働の仕事につきたいと願いつつも難しく、ずっと派遣労働で働いていた。

(3) 仕事と人間関係

これらの労働移動のプロセスから、ここでは以下の4点に注目しておきたい。

第一に、新卒で大都市へと移動した工業高卒・大卒の若者は、初職にある限りは、比較的安定的な生活状況にあった。しかし、いったん離職すると、一時的にせよ、非正規労働に就く傾向があり、とりわけ高卒の若者は、地元に戻る、不安定な労働の状況にあった。一方、学校を卒業後、ずっと派遣労働で働く若者は、景気動向や会社の都合によって仕事や地域が左右されるという意味でも、また労働条件や職場環境という意味でも、一貫して仕事は不安定な傾向にあった。とくに、県外で働いているとき、もちろん景気の影響などもあったと思われるが、時間がたつにつれて、労働・生活が不安定化していた。

第二に、地元の友人関係の重要性である。新卒で大都市へと移動した工業高卒・大卒の若者は、年を重ねるごとに新しい友人関係が広がっていた。しかし、地元の同級生もまた同時期に東京圏に多く就職しており、定期的には会ったり、何かの機会に関係が再活性化したりするなど、大きな資源となっていた。一方、派遣労働の若者で、地元の友人のコネで県外で働く先を確保した者は、一貫して友人関係が大きな役割を果たし、資源となっていた。それに対して、公的機関を通して派遣で働きに出た者は、同じ青森から働きにきた同期と友人関係を新しく形成するか、および孤立化する傾向にあった。しかし、地元に戻ってからは、地元の友人らと再び頻繁に関係を持っていた。

この若者の友人関係については、地元と大都市をつなぐさまざまな適応戦略を読み取ることができ、今後、いっそうの分析を行う予定である。

第三に、地元の親族関係、とりわけ実家の果たす大きな役割である。資源の少ない高卒者は、初職を辞すると東京圏にとどまることができず、実家に帰っていた。また派遣労働の若者も、親との関係に問題を抱えていて友人と同居している者以外は、実家に住むことができた。逆に言えば、セーフティネットとなりうる実家（他の家族成員の収入・家屋・情緒的紐帯他）がなければ、生活は不安定化・貧困化する可能性が高い。これは、一家離散にあつて、頼るべき家族や家がないなかでホームレス状態になった若者のケースからもうかがえた。

(4) 課題

本研究は、限られた数の事例分析であり、一般化については慎重にならざるをえない。とりわけ、最も焦点を当てていた不安定労働や居住状態の若者の協力者の確保が難しく、貧困化をとらえるには、課題が残った。

なお、共同研究として、2008年と2010年に若者の地方からの移動に関する量的調査を行っており、本研究を含むその成果は、『(仮)格差のなかで移動する若者たち——「東京」に出るとのこと』として、2012年秋に出版予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

① 山口恵子、2011、「グローバリゼーション下における旅館労働力の再編」『理論と動態』4号、59-75頁、査読無

② 山口恵子、2011、「日本の周縁地域における労働移動とジェンダー——女性の出稼ぎの過程に注目して」『人文社会論叢(社会科学篇)』25号、67-84頁、査読無

③ 山口恵子、2010、「統計にみる青森県の女性出稼ぎの動向」『人文社会論叢(社会科学編)』23号、209-219頁、査読無

④ 山口恵子、2009、「ホームレスの人々をめぐる政策と問題——東京都を事例として」『生活協同組合研究』401号、24-31頁、査読無

⑤ 山口恵子、2009、「若者の大都市への移動と生活——青森県出身者へのインタビュー調査から」弘前大学人文学部付属雇用政策研究センター編集・発行『都市に暮らす地方出身の若者の就業状況と地元意識に関する調査研究』(EPRC研究報告書 No. 4)、79-99頁、査読無

[学会発表] (計5件)

① 山口恵子「温泉観光地における下層労働力の再編」日本解放社会学会第27回大会・テーマ部会「労働力の再編と排除」、2011年9月4日、弘前大学

② 山口恵子「青森県の事例から」第9回雇用政策研究センター・フォーラム「地方から移動する若者たち」、2011年2月18日、弘前大学

③ 山口恵子、「都市の流動層と貧困化」、第28回日本都市社会学会大会・テーマ部会「大都市における貧困の現在」、2010年9月11日、日本大学文理学部

④ Keiko Yamaguchi, Difficulty and Adaptation of Migrant Youth in Japan, July 17, 2010, ISA XVII World Congress of Sociology, Goteborg.

⑤ 山口恵子、「温泉観光地における女性出稼ぎ労働者の流入メカニズム」、第82回日本社会学会大会、2009年10月11日、立教大学

[図書] (計1件)

① 山口恵子、2011、「温泉観光地の女性出稼ぎ労働者」、西澤晃彦編『労働再審4 周縁労働力の移動と編成』大月書店、117-156頁、査読無

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山口 恵子 (YAMAGUCHI KEIKO)

弘前大学・人文学部・准教授

研究者番号：40344585

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：